

令和4年度リンダウ・ノーベル賞受賞者会議 参加報告書 兼 アンケート

参 加 会 議： 第71回会議(化学関連分野)

所属機関・部局・職名： 東京工業大学・物質理工学院応用化学系・助教

氏 名： 久保智弘

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

様々な分野でノーベル賞を受賞された先生方が、受賞内容となった研究や現在行っている研究、または社会情勢などの研究とは異なる内容についても講演をされていました。講演を聞きながら、先生方が、その時の流行りの研究というよりは、それぞれが興味をもったことをとことん突き詰められていた印象を受けました。そして、どの先生方も、受賞後も研究の先端で貢献を残されていることに感銘を受けました。

David MacMillan: ノーベル賞の受賞内容であった不斉有機触媒とは異なる、フォトレドックス触媒を用いた反応についての講演でした。反応の Generality を向上するためのアプローチは、簡単に応用できるものではないものの、勉強になるアプローチでした。他にも、これまであまり調べてこられなかったラジカル反応についての話など、自身の今後の研究活動への応用余地があるお話を伺えました。

Richard Schrock: メタセンス反応に関する内容も含めて、主に研究室での最新の研究成果についてのご講演でした。分かりやすいストーリー建てで、研究発表の組み立て方が参考になりました。研究成果が素晴らしいだけでなく、それを面白いと思ってもらうためのプレゼンテーション能力の重要性を感じました。

Aaron Ciechanover: コロナがもたらした倫理的な問題についてのディスカッションで、社会問題に関して考えを聞くことができ、興味深かったです。Open exchange にも参加しましたが、参加者との対話を重視して、フィルターなしでコロナ対策などについてざっくばらんに意見を述べられていたのが印象に残りました。ノーベル賞受賞者がもつ発信力を活かされていた印象を受けました。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やエクスカーション等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

多くのノーベル賞受賞者が参加されていましたが、全員が全日程参加される訳ではありません。圧倒的に若手研究者の方が多いため、少人数での交流の時間をもつには、意識して、機会があればすぐに行動することが必要でした。

Brian Schmidt: 前年のリンダウ会議(オンライン)でのパネルディスカッションから Schmidt 先生と話をしてみたいと感じ、Science Walk に登録しました。コロナ禍での大学運営や、商業出版社の問題点などについて議論をしました。研究領域が異なっていたため、専門的な内容についての話はほとんどなく、様々なお話を伺うことができました。その中には、経営されているワイナリーやノーベル賞メダルに関する面白いストーリーなど、科学とは関係のない楽しい話もありました。特に、講演のストーリー展開や、新任教員へのアドバイスなどについて、Schmidt 先生の考えを聞くことができ、非常に有意義でした。

Venki Ramakrishnan: 夕食の場でカジュアルにディスカッションをすることができました。留学を通して得られる経験から、世界大学ランキングの問題点、または学生指導についてのアドバイスなどについて、率直にお話しいただきました。

Jean-Marie Lehn: 休憩時間に、動的共有結合についてのディスカッションと、研究室の運営に関する考えを聞かせてもらいました。大きな研究室で学生が自主的に個々の研究を進めるような運営方法を想像していたのですが、小さい研究室で、Lehn 先生自身が興味のあるテーマを進められていた点は興味深く感じました。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

想定はしていたものの、社会的で積極的に交流しようとする方が多いのが印象的でした。オンラインによる延期も影響してか、大学院生とポスドクだけでなく、研究室を主宰している研究者も多く参加していました。同年代の研究者による集まりのため、キャリアについてなど、化学以外でも共通の話題が多くありました。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

日本からの参加者の方々は、研究に熱心で非常に優秀な方々という印象を受けました。研究内容だけでなく、普段の研究室生活や今後のキャリア形成などについてもお話しでき、楽しい時間でした。様々なバックグラウンドをもつ人が集まる会議で、積極的に発言、交流をされている方が多かったですと感じました。

5. 特に良かったと思うリンダウ会議のプログラム(イベント)を3つ挙げ、その理由も記載してください。

Science walk: 雨模様だったため、カフェのテラス席で1時間程度ディスカッションをしました。カジュアルな雰囲気の中、ノーベル賞受賞者と近い距離で様々な話ができ、リンダウ会議の中でも記憶に残るイベントでした。

Open exchange: 先生によって内容は全く異なり、化学の専門的な質問がほとんどのときもあれば、社会問題についての内容が非常に濃い時もあり、毎回何が起こるかわからないある種の期待感がありました。

Dinner: 食事の前、部屋の入口にノーベル賞受賞者がどこに座るかを示す紙が貼られます。その紙をあらかじめ確認すると、話したい先生の近くに座ることが可能でした。

6. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット[具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載してください。]

Next Gen Science でプレゼンを聞いた若手研究者には、研究分野が近いためその夜メールでコンタクトし、翌日の休憩時間に会いました。プレゼンの内容についてディスカッションしただけでなく、こちらで行っている研究も紹介し、議論を交わしました。その後、共同研究の可能性や相互の学生の受け入れの可能性についても話し合いを行いました。

7. リンダウ会議への参加を通して得られた上記の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

リンダウ会議で受け取った教育、学生指導、留学に関するアドバイスなどは、普段の講義や研究室生活で活かすことができると考えています。これまで複数(第 11 回 HOPE ミーティング、第 70 回リンダウ会議、第 71 回リンダウ会議)の国際交流事業へと参加させていただきました。より多くの学生が海外に目を向けるよう、これらの会議に参加したことで得た経験を広く、積極的に共有していきたいと思います。

8. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージ

コンフォートゾーンから抜け出して、普段会うことがない人と交流する機会を持つと、きっと良い刺激を受けることになると思います。リンダウという素敵な場所で、最先端の研究に触れ、世界中の研究者と語り合える一週間は、非常に価値ある機会です。

(以上の記載内容は、氏名と併せて日本学術振興会ウェブサイトに掲載されます。)